

吉祥院六齋念仏 保存継承

六齋歴史研究会獅子の如く 村田大輔



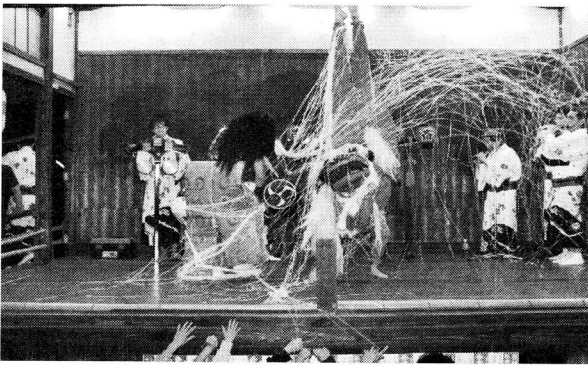
木村信彦 村田大輔

自分たちの世代で火を消せない

六齋念仏を初めて目にしたのは、まだ物心もつかない3歳か4歳の頃です。

親に連れられて、年2回吉祥院天満宮のお祭りに行っていました。その頃は、まさか自分があの舞台に立つなんて夢にも思っていなかったはずです。「すごいなあ」とか「かっこいいなあ」という憧れでしかありませんでした。転機が訪れたのは、小学校5年生の時でした。吉祥院子ども六齋が発足したのです。獅子舞いは二人一組でやるものですから、同級生の中で一番体の小さかった僕は自然と補欠になっていました。

その頃は、本当に獅子舞いがやりたくて、でもできなくて、とても悔しい思いをしたのを今



躍動感溢れる獅子を演じる二人（獅子と土蜘蛛）

でも覚えています。しばらくして、獅子舞いをやっていた一人が受験勉強のために、抜けることになりました。僕はようやく巡ってきたチャンスに一生懸命頑張って練習をしました。誰にも教わることなく、二人でビデオを見て技の研究をしました。今から考えると、ビデオを見ただけでよくできたなと思います。

子ども六齋で練習を積み重ね吉祥院天満宮に獅子舞いとしてデビューできたのは、それから4年後の中学2年生の頃です。

きっと今の僕があるのは、この頃に必死で練習をしてきたおかげだと実感しています。

今は当たり前のように獅子舞いを演じていますが、大昔から色々な方々の苦労があつて、六齋念仏が残っていることを勉強して知りました。「絶対に自分たちの世代で火を消してはいけない。」という思いで、吉祥院六齋歴史研究会を立ち上げました。

地域の活性化、そして代々受け継がれてきた素晴らしい歴史を若者に知ってもらうために、これから今までの苦労や経験を生かして、獅子舞いを続けていきたいと思っています。

1年に2回、4月25日・8月25日の六齋奉納に、少しでも多くの方々に吉祥院天満宮まで足を運んでいただけると大変幸せです。

一九九六年、吉祥院子ども六齋会が発足。村田大輔、木村信彦は、その一期生である。相方の木村信彦とは、約二十年近く獅子を演じ続け、阿吽の呼吸で今も舞台上に上がり続けている。彼らの初舞台は忘れられない。獅子が碁盤（五段）に上がれない日が続いたが、何と彼らは初舞台で碁盤で逆立ちし、見事獅子を演じたのだ。その瞬間、胸が熱くなり、獅子の復活を感じたのは私だけではないはず。六齋の花形と呼ばれる「獅子と土蜘蛛」が見事に復活した瞬間であった。現在二人は、後継者育成に力を注ぎ、中学生の弟子が稽古をはじめ獅子の「後継者」が生まれつつある。大輔と信彦の獅子に対する熱い思いが引き継がれるのもそう遠くはない。

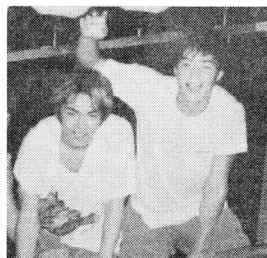


吉祥院六斎保存会 獅子演技解説



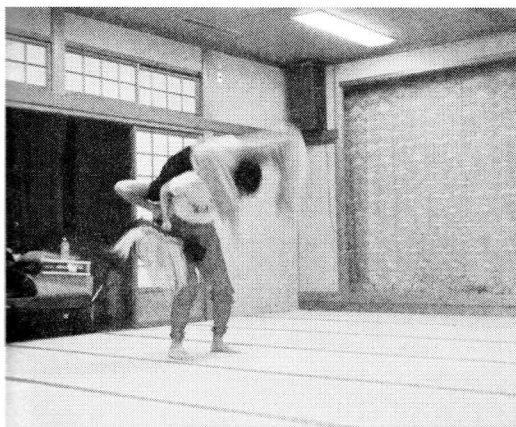
獅子前／村田大輔

Daisuke - Murata

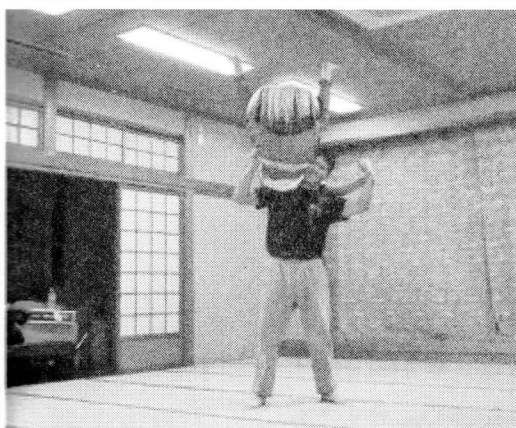


獅子後／木村信彦

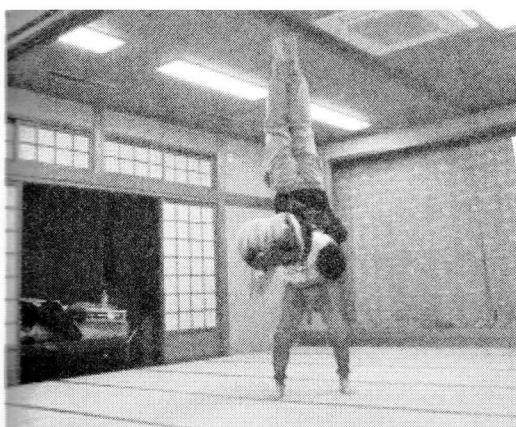
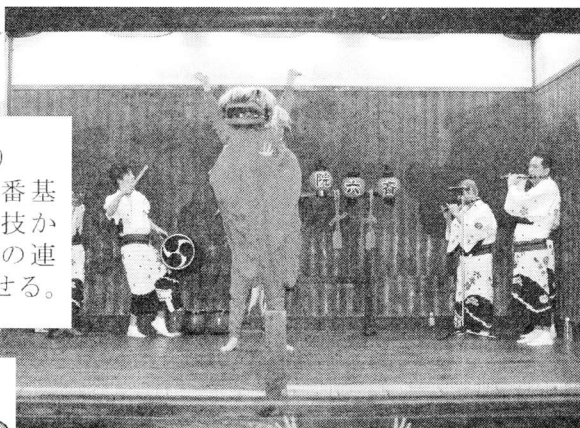
Shinobu - Kimura



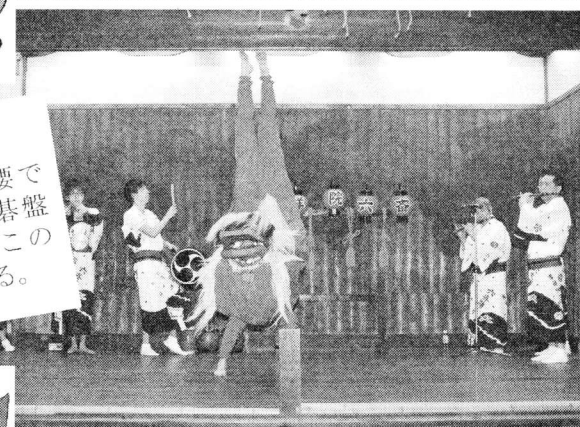
技名：獅子返り
私達が一番こだわってきた技。獅子が後方に連続で回転する迫力ある技。カッコイイ！



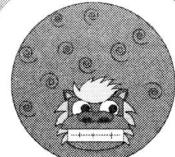
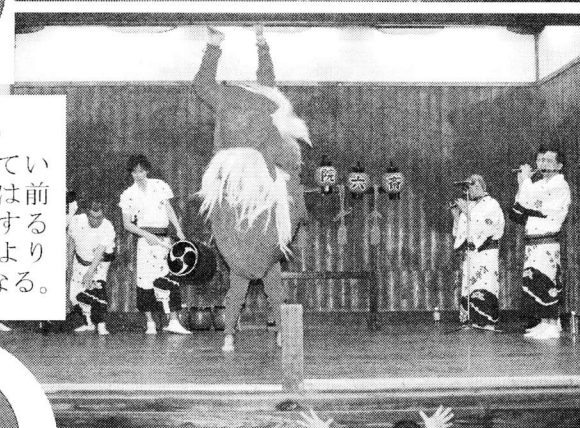
技名：前上がり
獅子の技で一番基本の技。この技から獅子返り等の連続技へ発展させる。



技名：後上がり
後役が前役の腰で倒立する技。碁盤での倒立は、この倒立をしている。



技名：肩上がり
後上りに似ているが、この技は前役の肩で倒立する技で後上がりよりも倒立が高くなる。



場所／京都市吉祥院いきいき市民活動センター
高齢者ふれあいサロンにて

解説／木村信彦
撮影／岡本久美子（吉祥院いきいき市民活動センター職員）